



TITLE:

東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成

AUTHOR(S):

吉川, 利治; 桃木, 至朗; 渡辺, 佳成; 菅谷, 成子

CITATION:

吉川, 利治 ...[et al]. 東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 88-95

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187404>

RIGHT:

東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成

1. 研究組織

研究代表者：吉川 利治（大阪外国語大学外国語学部・教授）

研究分担者：桃木 至朗（大阪大学文学部・助教授）

渡辺 佳成（岡山大学教養部・助教授）

菅谷 成子（名古屋女子大学短期大学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

本研究は重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」における「外文明と内世界」に関連する課題として、主に東南アジアの言語資料を用いて国家意識の形成を研究対象にする。従来、研究メンバーは東南アジアの国家の形成に関心をもち個々に論文を発表してきた。重点領域研究では、東南アジアの主要国家が醸成してきた国家意識の歴史的展開に焦点をあて、国家観の普遍性と固有性、正統性原理、また国家や民族間の力関係のなかで組まれたネットワーク、外圧への抵抗という外因と少数民族や移民の同化吸収という内因による国家イデオロギーの構築など、近代国家の形成に至る精神的基盤の史的研究をめざす。

吉川がもつ研究の関心は、タイが19世紀から20世紀はじめに接触したヨーロッパ列強、かつ大量に流入する華僑という外圧を受けて、国民国家として成り立たせていくための論理と政策を模索していた時期、過去の栄光という歴史の伝統を引き出し、王権を強化し国家イデオロギーを形成しながら、ヨーロッパ列強に対抗する論理、移民を同化吸収する方策を見いだす過程を、時の権力者や言論の担い手の言説のなかから明らかにしようとする。

桃木は、前近代の東・東南アジアの国家間関係を「中華」や「小中華」の相互関係のネットワークととらえ、それぞれがもつ同心円状の統治体制の延長としての華夷秩序、それを支える世界像・歴史像としての華夷意識のありかたを探ろうとする。東南アジア大陸部の近世においては、ベトナム世界、タイ族世界、ビルマ世界など、「小中華の並立状況」が存在したのではないかという問題提起から研究を開始した。

渡辺は、11世紀以来のビルマでの王朝の交代のなかで残された記録をもとに、歴代の王朝の支配のイデオロギーを抽出し再構成することによって、それぞれの支配者階層が抱いていた国家観を探究する。そして、国家観や国家意識の変遷やその理論的淵源を考察する。

菅谷は、フィリピンにおける国家意識形成の前提のひとつをなすものとして、18世紀中葉以降の中国系メスティーソの社会集団としての析出をとりあげ、とくにマニラを中心とする中国人移民社会の変容という観点から分析することを研究課題としている。

3. 平成5年度の研究経過

平成5年度は研究会を以下のように3回開催した。3回とも、発表者とメンバー以外に20人前後の参加者があった。

第1回研究会（9月18日、於大阪）

桃木至朗 「ベトナム型華夷意識序論」

第2回研究会（10月16日、於大阪）

渡辺佳成 「ビルマ王権研究の成果と課題」

第3回研究会（12月18日、於沖縄）

豊見山和行 「近世琉球の海事法と漂流問題」

西里喜行 「琉球における国家意識の形成・定着・変容について」

吉川利治 「タイ近現代史にとってのスコータイ王朝——タイの創られた伝統——」

菅谷成子 「18世紀、マニラ中国人社会の変容」

(1) ベトナム型華夷意識序論

第1回研究会で桃木は、10～19世紀ベトナム王朝国家の華夷意識を支えた世界像・歴史像をとりあげ、対中国関係とその他の対外関係に分けて検討した。前者では、中国の侵略への抵抗と中国との対等性の主張による国家権力の正当化という有名な事実の影で見過ごされてきた、正統性原理の歴史的・地理的多重性を国号、始祖説話、歴代支配者に関する名分論などについて検討した。とりわけ「南中国」をどう認識するかによって、その多重性が生じていると指摘し、15世紀以前は南中国でのベトナムの（系譜上の）中心性を強調するが、18世紀には南中国も中国の一部とみて、それとの系譜的關係を否定し、その一方で自己の中華性そのものは極限まで強調するようになる、と説明した。次いで、中国文化圏に属さないその他の周辺諸国に対して、ベトナムが中華として臨んだ様子を検討した。ベトナムは14世紀以降によりややく占城（チャンパ）などの隣接諸国を圧倒する力をもち、明瞭な華夷意識を獲得していく。当初は諸国の朝貢国化に重点をおいていたのが、17世紀以降には「蛮夷」の同化にも力を入れるようになる。対中国関係とその他の対外関係の両方にあらわれた15世紀以前と17、18世紀との差異の原因を、内因と外因の双方から検討する必要を指摘した。

(2) ビルマ王権研究の成果と課題

第2回研究会で渡辺は、ビルマの王朝にみられる支配のイデオロギーを抽出し再構成して、ビルマの王権は、絶対権力者としての「水と陸を統べる王」「生命の王」、支配の正統性をしめす「太陽王統の子孫」「転輪聖王」という觀念の内在をあげ、王権研究に三つの流れが

あることを指摘する。歴代王朝のなかでは、パガン王朝（1044－1287）では「神としての王」「救済者、最大の功德集積者・分配者としての王」「三十三天の支配者」「人間としての王」「超人間としての王」など、支配者としての王の理念と機能役割を示した。第二次タウングー王朝（1597－1752）とアラウンパヤー王朝（1752－60）においては、法と秩序を維持擁護しながら統治する王とみなし、「転輪聖王」「未来仏としての王」として、その地位の根拠を過去世の「カンマ」（業）で説明し、所有する波羅蜜で征服王の力を顯示し、「水と大地の支配者」「生命の王」と呼んで物的・人的あらゆる資源の独占を主張し、王に対してのみ服従を誓わせる関係を明らかにした。コンバウン王朝（1752－1819）においては、王は法の護持者として秩序の維持にあたり、「転輪聖王」の実現が強調され、法による世界征服、混沌から世界を救う世界の支配者として君臨するという特徴をあげて。そして法による世界支配、仏教とダンマの護持という大義のための戦いがビルマによるタイのアユタヤ征服、インドのマニプール攻略につながっていくと解釈する。さらに、世界像の表象としての転輪聖王概念、転輪聖王の支配領域を年代記などから抽出分析してみせる。結局、ビルマの王朝は「王権への権力の集中を正常で望ましい状態と描写することによって、政治権力の分散という抗しがたい現実を心理的に慰める」というリーバーマンの言葉を引用する。ビルマの転輪聖王概念に対して、同じ上座仏教を受容したタイでの展開、支配領域の有限性・無限性という点でベトナムの中華概念との対比、また、本家のインドやスリランカでの展開・意味性を検討することにより、普遍性・固有性が明らかになると考える。

第3回研究会は沖縄市内のゆうな荘で開催し、琉球大学の琉球史学者、西里喜行教授、豊見山和行助教授を招いて琉球史と東南アジア史との合同研究会を開いた。合同研究会には、同じく琉球史学者・真栄平房昭助教授（神戸女学院大学）を招待し、研究会のコメントと沖縄県立博物館および史跡の案内と解説をお願いした。他の班からの参加者以外に浦添市立図書館長高良倉吉氏、沖縄県立図書館館員、朝日新聞論説委員らが参加していた。日本と中国のあいだに存在した琉球王国の歴史的立場を知見し、比較研究の上で大きな刺激を受けた。

(3) 近世琉球の海事法と漂流問題

豊見山の報告は、薩摩支配下における琉球の対応のあり方を探り、薩摩の琉球支配の特質を探る。1765年以降の薩摩への上納米、薩摩側の海運事情で琉球は次第に疲弊していく様子を資料をもとに解き明かす。琉球側が先例や薩摩の「御法」、琉球の慣習法「国法」や「船法」を盾にして薩摩との交渉に臨む手法は、単純な支配・隷属では説明し得ない、王国でつちかわれた国意識があることを示していると説く。小国が大国との間に結ばれた政治経済のネットワーク

のなかで、慣行と法を武器にして筋を通し、大国との交渉に立ち向かう小国の国家意識は感動的である。

(4) 琉球における国家意識の形成・定着・変容について

西里は、琉球の自己意識（琉球意識）が形成されて国家意識として定着していく過程が琉球史の形成・展開過程、とりわけその対外関係に大きく規定されている、と説く。その対極には対外意識＝国際意識が働き、「唐や差傘、大和や馬の蹄、沖縄や針の先」という琉球の自他認識がどのような歴史過程のなかで形成されてきたのか、とりわけ「琉球人」、「琉球国」意識の形成における奄美・先島の位置づけを検討した。17世紀以前の古琉球期、薩摩の琉球侵略以後の近世期、琉球処分期の時期に分けて、資料と年表および地図で指し示しながらの説明は説得的であった。なかでも、琉球の砂糖生産をめぐる薩摩藩は、オランダ領東印度の場合との近世植民地論としての比較研究が可能であるとの意見があった。

(5) タイ近現代史にとってのスコータイ王朝——タイの創られた伝統——

吉川は、1987年に巻き起こった、タイ文字による最初の碑文ラームカムヘーン王碑の真偽論争を取りあげ、近代から現代にかけて創りだされたタイの伝統的なものを解き明かそうとする。真偽論争のシンポジウムでは、まずこのスコータイ王朝の碑文の内容がタイの歴史・文化・思想・道徳に多大の影響を与えてきたと説くカンラヤーニー内親王（＝現国王の姉）の冒頭発言に、王家が真偽論争の行方に並々ならぬ関心を寄せていることを示し、19世紀のモンクット皇太子（のちのラーマ4世）による偽作という、その根拠とするピリヤの説を提示する。そして、20世紀に入ってからワチラーウット皇太子（後のラーマ6世）、ダムロン親王、クン・ウィチットラマートラー、ルワン・ウィチットワータカーン、セーニー・プラーモートら、タイの政治を動かし、言論・思想界をリードしてきた人びとのラームカムヘーン王碑文を解説し賛美する言説をとりあげる。そこに表現されている到来する欧米勢力や流入する華僑の外来勢力に対して、タイが光輝ある歴史と優れた伝統をもっていたという主張が、タイの現代ナショナリズムの基盤になっているのではないかと指摘する。13世紀の作ではなく19世紀の作とするラームカムヘーン王碑文の創出と、碑文内容が繰り返されタイの伝統として礼賛され宣伝されてきた過程は、E. ホブスボウムが定義づけたところの「創られた伝統」にまさしく相当する性質のものではないかと考える。

(6) 18世紀、マニラ中国人社会の変容

菅谷は、18世紀中頃のアランディア総督に始まり約半世紀にわたって実施されたスペイン政庁の非カトリック中国人追放政策が、マニラを中心とする中国人移民社会を従来の出稼ぎ

型からカトリックからなる小規模な定住型の社会に変容させたこと、およびこの変容が中国人メスティーソの数的増大の基盤を提供したことを指摘した。中国人移民社会のカトリック化は、脱「中国人化」ともいえるもので、カトリックの受容に象徴されるスペインの支配を主体的に受け入れることによって、中国人移民社会の存続をはかったものといえる。その結果、中国人移民社会は、フィリピン社会を正統に構成する要素となった中国人メスティーソを生み出す母胎となったと説明する。また、在住中国人のカトリック化がこれらの中国人の活動の幅を広げ、例えば、スルー諸島などスペインの直接支配下に入らない地域の交易に従事したこと、また、このことがカトリック中国人およびメスティーソの人的ネットワークの形成にも寄与する結果となったであろうこと、同時に、中国人社会と別のメスティーソの社会が確固として形成されていったことを裏づける手がかりを提示した。

4. 研究の成果とフロンティア

桃木は、先の発表を通じて、南中国との関係におけるベトナムの正統性原理の多重性を明らかにした。それはベトナムがそれぞれ、①南中国全域、②広東・広西とベトナム、③現実のベトナム、の範囲の中心であると主張する。13世紀の②から15世紀の①への空間的拡大と平行して、国家の起源が前700年から前2000年へと時間的にも拡大される。しかし18世紀には、②③への縮小が起こる一方で、自己の属性としての中華性の主張が強まる。「中国への対抗意識」は同じでも、その表現が「南中国世界の代表」から、より非地理的な「もう一つの中華」へ変化したと見られる。一方、中国以外との対外関係では、「あるべき朝貢国群」の時期による変遷を明らかにしたが、それに関連して、当初意識していなかった新しい問題が浮上した。それらが単に周辺諸国を列挙したものか、それとも「インドシナの覇者」「南シナ海の覇者」など、ベトナムがより地理的な自己規定をしていたことを示すのか、またそれらの「朝貢国」との関係のあり方はどう観念されていたのかといった問題に取り組む。

渡辺は、まず王権研究の検討を行うなかで、正統性の論理とその淵源の考察を通じて得られる王権の絶対性と現実の歴史過程のなかで行動する王権の脆弱性の齟齬の分析を行うことによって、個々の王朝の王権の時代性、固有性を明らかにするという手法の有効性を確認した。また、個々の史料の検討を通じて、正統性の論理の中で、特に「転輪聖王」の概念が、国家意識を考察していくうえで、有効であることを明らかにした。すなわち、仏教の理念の下では、全世界を支配し、しかも非暴力性とその権力の非継承性が強調されるという、現実の王朝の政治力学のなかでは存在し得ない支配者像が、実現可能な理想として構成されていき、そのなか

で、本来無限であったはずの支配領域が限りあるものとして意識されていたと説く。そして、その理想とされる有限の支配領域も時代とともに変化していることが明らかになる。今後、こうした考察をさらに加えていくことによって、当時の支配者たちがどのような世界像を有し、そのなかで自らの政権をどう位置づけていたのか、を探究しようとする。

吉川は、ラームカムヘーン王碑文が19世紀中頃に創作され20世紀になって“解読”されたとする偽作説を踏まえて、その内容に盛られた国王と仏教と民衆の結びつきがタイ固有の政治的伝統として強調されていく過程で、「民族・宗教・国王」の三位一体を「タイ的原理」とする、明確な国家イデオロギーに発展させていった可能性を考え、その過程を追究する。またラームカムヘーン王碑文が描く、民衆が国王に直訴できるディーカー制、自由貿易、移民の受け入れ、広大な版図など、模範的な制度をもつ理想的な国家として讃えられるものは、19世紀当時のタイをめぐる内外の情勢を反映した、ラーマ4世の政治思想を盛りこんだ内容ではなかったかと考える。そして、ラームカムヘーン王碑文の“解読”によって、これらはタイの伝統的政治理念として、20世紀の政治の場に影響を与えてきたものと推測する。またタイ国史にとって、タイの光栄ある国家はまずラームカムヘーン王の時代に始まると著述され、国威発揚の目標が示され、ナショナリズムに向かう過程が準備されてきたと推定する。ラームカムヘーン王碑文自身の真偽をめぐる問題も、こうした仮説の解明過程で、より鮮明にできるものと考ええる。

菅谷は、スペイン支配下のフィリピンでは、住民がカトリシズムを主体的に受容し解釈することにより世界観を共有し、またヨーロッパの自由主義的な思想の流入および諸島内の商業ネットワークの発展などによって、19世紀後期から末期にかけて民族共同意識が形成され、これがフィリピン革命につながっていったと考える。このなかで、植民地社会の富裕層・有力層として上昇をとげていった中国系メスティーソは、フィリピン社会を正統に構成する要素として民族共同意識のなかに取りこまれていき、さらに、民族共同意識の形成過程で生じた啓蒙運動あるいは民族主義的な運動のなかで指導的役割を演じるようになった、と位置づける。この意味で、中国系メスティーソがなぜ18世紀中頃以降に植民地社会における新しい社会集団として顕在化してきたかを解明することは、フィリピンにおける国家意識の形成過程を跡づける際の重要なポイントになると考える。

5. 今後の課題

桃木は、時期的には上記のとおり、17世紀以降の史料の検討を進める。特に、18世紀以降の南中国観の変化と19世紀における「越南」「大南」など新しい国号・自己規定との関係に注目

する。またその時期の史料には、かなり具体的に周辺諸国からベトナムへの「朝貢」の様子が記録されている。ここから、客観的な「華夷秩序」のありかただけでなく、当時の「華夷意識」をも探ってみようとする。また、17～18世紀は北の正統王朝（黎朝）に対し、南に広南阮氏政権が分立している。今年度はほとんど扱えなかったが、広南阮氏の独自の国家意識についても探ってみる意欲を示す。

渡辺は、上記の研究が各王朝の代表的な史料の分析を通じて得られたものであるが、さらに多くの史料を収集し検討することによって、その実証性を高める必要があると考える。とりわけ、抽出した「転輪聖王」概念の実証性を高めるには、年代記以外に、各時代ごとに、碑文、詔勅、法令集、などの史料を収集し検討を加えていく。また、歴史史料以外の伝説や文学などの言語資料、国家儀礼に関する文献資料にも着目し、検討を加えていく。そうした分析を通じて同時代の意識に関わるものをできるかぎり網羅的に挙げていき、その中からその時代の真の意識を探究していく。と同時に、様々な形で記録を残した作者の念頭には、その範となるべき転輪聖王の概念が存在して、それを参考にして概念を構想し表現したことが考えられるので、各時代ごとの概念の比較はもちろんのこと、インド、スリランカの史料に如何なる形で転輪聖王概念が表現されているのかをも考察していく。また、権力による無限性の主張と有限性の認識という観点から、アジア前近代を視野においた比較総合化をめざす。

吉川は、20世紀のタイを動かしてきた国王・首相・大臣およびその側近となって文筆活動をしていた人物の言説の中から、ラームカムヘーン王碑文にかかわる見解、国家イデオロギーに関する主張を拾い出すことを大きな課題とする。またそれに先立つ19世紀のモンクット王やチュラーロンコーン王、およびダムロン親王らの著述や発言のなかから、政治理念の展開を見だし、国家イデオロギーの抽出を試みる。そしてそれらがいかなる精神基盤にたつものか、どのような内外の状況を反映したものかを考える。1273年に創られたとするラームカムヘーン王碑文の内容が、果たして13世紀の政治経済情勢を反映するのか、あるいは19世紀の状況を反映するものなのかは、この碑文の真偽論争の結論を導くのみならず、タイの伝統や国家意識の連続性を考えるうえで、大きなポイントとなる。

菅谷は、中国系メスティーソが社会集団として析出してくる背景として、18世紀後期におけるマニラの中国人移民社会の変容の具体的諸相をより鮮明にする作業に着手する。そのためには、初年度に収集した史・資料を含めて、さらに収集文献の整理・分析作業を進め、事例研究の積み重ねを行う。また、地方史を中心とする先行研究の成果を取り入れ、マニラの中国人移民社会の変容が地方における中国系メスティーソの存在にどのような影響を及ぼしたのか、さ

らにカトリック化した中国人移民社会とメスティーソとのかかわりがいかなるものであったのかを把握する。そうすることによって、18世紀末期からマニラが実質的に外国貿易に開かれるのを契機に、中国系メスティーソが直ちにマニラと地方の商業ネットワークにおいて優位にたつことができた背景が明らかになると考える。そして、諸島内の各地域を結ぶ中国系メスティーソの活動が、植民地フィリピンにおける民族共同意識形成への前提条件を生み出す重要なファクターであったと考え、その解明に重点をおく。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

吉川利治

「『実存』としての王」「歴史の中の王室」*Seven Seas*, No. 61 : 44-48, 54, 1993.

桃木至朗

「『中国化』と『脱中国化』——地域世界の中のベトナム民族形成史」大峯顕・原田平作・中岡成文編『地域のロゴス』世界思想社, pp. 70-81, 1993.

“Japan and Vietnam in the Asian Trade System in the 17th-18th Centuries.” *Vietnam Social Science*, 1993 (2) : 43-50, 1993.